



【研究者インタビュー】 No.10 工学研究科 高橋雅英
教授

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-01-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/00017202

リポジトリ・オープンアクセス研究者インタビュー No.10

工学研究科 高橋雅英教授

2020年11月10日(火)

図書館ではリポジトリ、オープンアクセスについて広く知っていただくために、研究者インタビューを実施しています。今回は、大学評価の視点からオープンアクセスを推奨されている高橋雅英先生にお話を伺いました。

図書館：

先生の研究分野について教えてください

高橋先生：

溶液プロセッシングとって、ビーカーの中で反応をコントロールして機能性材料を作っています。主な応用としては半導体や、レーザー材料、最近では刺激が加わると形が変わる応答性材料などです。将来は、人間が飲み込むと人体を泳いで患部に到達し、自爆してガンとともに消えるというような人間の体の中で働くソフトロボットを作りたいと考えています。



図書館：

オープンアクセスジャーナルには投稿されていますか

高橋先生：

事前にオープンアクセスチャージがいくらか調べてインパクトファクターと天秤にかけ、インパクトファクターの方を重視して雑誌を選んで投稿しています。オープンアクセスチャージが20万円くらいなら払ってもいいですが、最近は50万円以上のもので、その時の経済状態で判断しています。化学の分野ではアメリカとイギリスの化学会が2大出版社で、アメリカは投稿料が高いですが、イギリスはフリーなことが多く、結果としてイギリスに出すことが多いので、オープンになっているものも多いです。いい論文ができた時はいい雑誌に出したいので、オープンアクセスジャーナルではないものにも投稿します。

図書館：

オープンアクセス投稿料は研究費から支払われているのですか

高橋先生：

大学から支給される研究費は少ないので、科研費か金額が大きい外部資金から支払っています。

図書館：

どの雑誌に投稿するかは研究者の間で情報交換されるのですか

高橋先生：

研究者間では共通の理解があるので、特に情報交換等はしません。基本的には、成果の内容に合ったジャーナルを選びますが、インパクトファクターも参照します。インパクトファクターが7~20 くらいの雑誌ならインパクトファクターの順ではなく、その分野で一流と評価されている雑誌に投稿することが多いです。Journal of American Chemical Society の方が ドイツの Angewandte Chemie よりレベルが高いので、「JACS がダメならアング」のような感じです。

図書館：

電子ジャーナル化、オープンアクセス化によって、論文の投稿状況は変わりましたか

高橋先生：

最も権威のある Nature などの雑誌のステータスは変わりませんが、急速にステータスを上げてきているのが Web オンリーのジャーナルで、掲載までが早いです。投稿後査読に3週間、改訂に2, 3週間くらいで、受理された日の夜には公開されるので、公開を急ぎたい場合は Web オンリーの雑誌に投稿することが多くなっています。一方、Web ジャーナルは掲載論文数が多いので、自分の論文が、どんどん出てくる新しいものに埋もれてしまう可能性が高く、SNSなどで自分で宣伝して埋もれないようにしないといけないし、何百の論文の中から、自分の興味のあるものを探すことも難しくなっています。

図書館：

図書館では学生に論文の検索方法などを指導していますが、先生方はどのように論文を検索されているのでしょうか。

高橋先生：

今は興味のある出版社やジャーナルなどの Twitter に登録しておくで、新しく掲載される論文の情報が Twitter に届いてアブストラクトまで読めるので、毎日通勤電車でチェックし、読みたいものの URL を iPhone のメモ帳に張り付けて、メモ帳を研究室の PC と同期して論文を読んでいます。

調べる時には Google を使います。Scopus を使うのは研究分野を特定して、過去の重要な論文を誰が引用しているかなど引用論文をピックアップする時などですが、最近は Google scholar でそれのできるので、Scopus は最終手段です。Google scholar は論文だけではなく、特許も紀要も検索できるので、スピードや網羅性を考えると Google がメインになります。

図書館：

府大にはオープンアクセス方針があり、教員の研究成果は原則としてオープンにすることになっていますので、その促進のため研究推進課と共同でオープンアクセス方針の広報動画を作成しています。オープンアクセスの方法として、リポジトリに著者最終版を掲載することもできます。

高橋先生：

オープンアクセス方針についてこれまでは意識していませんでした。リポジトリについては登録手続きが分かりにくいです。リポジトリのページに英語でたどりつけないのであれば登録する意味がないし、論文のビジビリティを上げるのに直結していないというのが正直な感想ですが、Google や Twitter から直接リポジトリが見られるようになれば状況は変わるでしょう。

最近、海外の大学の研究者と論文を共著した場合、その論文を自大学のリポジトリへ掲載する許可を求められることが多いです。リポジトリに登録しないと大学がパブリケーションフィーを払ってくれないようです。このように論文投稿のプロセスにリポジトリ登録が組み込まれているとアーカイブとして充実し、結果としてアクセスが増えるのではないのでしょうか。

オープンアクセスジャーナルへ投稿することが一番インパクトが高いので、大学がそれをサポートする意義はあると思います。予算には限度があり全部の論文のオープンアクセス化に対応するのは無理なので、どこまでお金をかけるか、誰が何を選ぶかが難しく、最大公約数でどっちつかずになりがちです。

図書館：

オープンアクセス費用を大学で援助するところや、電子ジャーナル契約にオープンアクセス料金を組み込んだプランなども出てきています。今後は図書館だけではなく大学として支援する方向で進むのでしょうか。

高橋先生：

研究者個人の視点からいうとオープンアクセスにすることは研究のクオリティと関係がなく、意義を感じている研究者はまだ少ないです。オープンアクセスにすることによって、サイテーションを上げるなど投稿した研究者にも意味はあるし、図書館がオープンアクセスに貢献することで、結果として大学の露出があがるという点で期待しています。図書館の本業ではないかもしれませんが、大学の存在感を高めるため、組織的に、システムティックに予算要求をしていけば、制度化できるのではないのでしょうか。

図書館：

図書館への要望、アドバイスなどおきかせください

高橋先生：

図書館、リポジトリの役割としては、大学の露出を高めてほしいですが、今の図書館のHPは、図書館利用者以外を対象にした見せ方をしていないので、研究者が必要なデータに簡単にたどりつけるようなHPが必要です。

オーストラリアのメルボルン大学、アデレード大学などのHPは、海外からの学生を誘致するための情報が豊富でわかりやすく、カリフォルニア工科大学はYouTubeの中にライブラリを持っていてとてもわかりやすい動画がアップされています。今の図書館のページは項目が多すぎてページ構成を理解するのに時間がかかるので、クリック数が少なく必要なページにたどり着けるような、直感的に、見せたい情報に誘導するようなページ構成にしないといけないと思います。

そして、良いHPを作っても、閲覧者を誘導する工夫が必要です。HPへの道をつけるには今はSNSしかないと思っています。図書館もSNSを使って常に情報を発信すべきです。Twitterで情報を流し、リツイートでフォロワーを増やすという循環が必要です。HPやリポジトリの英語ページの作成も必須だと思います。

図書館：

高橋先生、お忙しいところありがとうございました。